

平成十八年度 修士論文の要旨

埴原和郎の「二重構造モデル」の日本人起源説

コヴァレンコ・オレクサンドル

埴原和郎は一九七〇―一九九〇年代を代表する日本人起源論者の一人である。彼の「二重構造モデル」という学説を分析することによって、現代の日本人起源論の流れとその理論における「日本人」像を明らかにすることが本論文の目的である。その目的を達するために、①「二重構造モデル」における中心的な論点を確認し、埴原の理論の矛盾点と信憑性を明らかにすること、②「二重構造モデル」における「日本人」概念の位置づけを明確にすること、③「二重構造モデル」の

系譜を探究して、その理論を日本人起源論の言説の中で位置づけること、という三つの課題を設定する。研究方法は主に言説分析である。

本研究の結果は、以下の通りである。「二重構造モデル」においては論拠不足・矛盾点が多く、資料が限られていることと、アジア全体の動きの説明が欠けているがために偏った「日本人」像が描かれている。

「二重構造モデル」によると、「日本人」は政治的共同体「日本国民」と生物的共同体「日本人集団」という二つの統一した共同体をなしている。後者は「二重構造」を形質の地理的勾配として維持しているまとまった人種的集合体である。「日本民族」としての「日本人」は存在せず、そのかわりに、アイヌ民族、琉球民族、大和民族という三つの日本のエスニック集合体が存在している。日本における「日本国民」と「日本人集団」は日本の単一性を象徴するものであり、一方、三つの民族の存在は日本の多様性・異質性を物語るものである。埴原の学説の主な弱点は方法的な立場と概念の問題であり、「日本人」・「民族」・「人種」の捉え方は「モデル」の理論の都合によって変わっていくのである。

「二重構造モデル」は、国際化とグローバル化の時代に登場した新しい日本人起源説である。その学説は、二つの基本的な見解から成り立っており、それは、長谷部言人と鈴木尚

の「単一民族論」およびE.ベルツの「混合民族論」である。「二重構造モデル」におけるその二つの理論は、「日本人集団」は多民族複合体で、二つの異なった形質的集団の共存を維持する一つの人種であるというふうに合成されている。埴原の「二重構造モデル」は、混血を重視する日本人種論であり、元来の「混合民族論」と「単一民族論」とのあいだに架け橋の役割を果たしている理論である。「二重構造モデル」を継承した日本人起源論では、埴原が提起した「混合民族論」と「単一民族論」とを合成したものがよく見られる。